

紹介

フェレンチ著「綜合的最適人口論」

The Synthetic Optimum of Population by Imre  
Ferenzi. International Institute of Intellectual  
Co-operation League of Nations, Paris, 1938

著者はハンガリヤ人でブダペスト市の社會政策の顧問、ブダペスト大學の講師等をやつた事があり、現に國際勞働局の職員である。本書は本誌四月號に私の紹介した國際聯盟の外廓團體たる國際研究會に對し、その研究問題たる「國際問題の平和的解決」の第一議題「人口、移民、植民」の問題に關し提出した研究報告である。

惟ふにもし世に人口政策なるものがあるとするれば、それは何を以つて最も適當なる人口とするかと云ふ標準、別言すれば望ましき人口状態なるものがなければならぬ筈である。然しこの問題は判断の標準（個人の幸福の爲か國家の發展の爲か）及前提（平和か戦争か、孤立經濟か國際交易經濟か等）が問題であつて、是最適人口論は人口理論及人口政策上の中心問題たるべくして實は今日迄殆んど學說らしい學說のない所以である。本書の著者はこの點に就て如何なる見解を開陳せんとするか。

本書は全體を二部に分ち第一部は數的最適人口として從來の最適人口論

を取扱ひ、第二部を質的最適人口論として、人口學的最適人口並社會衛生及優生學上の問題を取扱ひ、更に彼の結論たる綜合的最適人口論を提唱して居る。先づ第一部第一章に於て人口政策及人口論の史的發展を試みて居る。彼は曰ふ、十八世紀の終り迄歐洲諸國は軍事上、政治上のみならず、經濟上、財政上よりして常に人口の増加（及領土の獲得）を重要とした。この點に於て重商主義も、フィジオクラットも、アダム・スミスも變りはない。（一四頁）佛國革命後初めて人は個人の幸福を論ずることゝなつたが、個人の幸福よりして望ましき人口状態に關してゴドウィンとマルサスとの間に相反する論が現れた。然し明確に最適人口論を唱へたのは佛のシスモン・ド、英のキャナン、獨のウォルフ、瑞典のウイクセル等で、（一九頁—二〇頁）この問題が最も重要な論議の題となつたのは歐洲戦後のことであると云つて居る。

第二章に於て人口密度測定の方法を論じ、領土一單位當りの人口密度、耕地一單位當りの人口、農地一單位當りの人口、人口と主要自然富源の割合等を比較して居るが領土と云ひ耕地と云ひ何れも人口收容力に於て大差あり且國際經濟の今日、右の標準は正確に人口密度を比較する標準ではないと云ふ。

是等の問題を論ずるに當り、彼は屢々、東洋諸國の事實を引用して居るが、例へば日本と印度とを比較して、日本の耕地面積は人口一人當り〇・〇九六ヘクタールであるに對し、印度は〇・三九三ヘクタールであるが、一ヘクタール當りの米の收穫は日本では三三・九キントルなるに對し、印度では一四・九であるから、單に耕地面積を以つて兩者の人口密度を計ることを得ない一例として居る。（二七頁）又歐洲の例では耕地一平方キロメートル當りの農民の數を比較し、ポーランドは九十一人なるに對し、白

耳義は七十二人、和蘭は七十一人でその差ならざるも、農民一人當りの生産高は和蘭はポーランドの七倍乃至九倍なりとし、この見地よりポーランドの代表が國際聯盟に於て、同國には九百萬人の農民の過剰人口ありと云つた事を引用し、農民の人口密度及その生産力に鑑みるときは、東歐洲及バルカンの農民の生活程度は西歐及中歐の農民の生活程度に比し、五分の一乃至六分の一にも達しないと述べて居る。(二一九頁) その實證として東歐諸國及バルカン、殊にポーランド人民の營養の不充分なる事實を論じ、是等の國に於ては交換經濟及移民に依つて經濟の改善が計られつゝありとし、然るに世界中に於て、他との經濟上の交通なく、殆んど孤立經濟を營んで居る地方として北支那を挙げ、此處では土地よりの收穫が人口の密度を決定するとして、北支那に於て饑饉が屢、襲來して現實に餓死によつて人口を制限して居る事實を述べて居る。(三〇頁)

第三章に於て「一國單獨に考察したる假想的最適人口論」なる標題の下に、著名な經濟學者の最適人口の觀念を論じて居るが、經濟學者の説は最適人口とは一人當り最大の收入、財貨(消費財と限定するものあり)又は生産を擧げ得べき人口と云ふに歸する様である。然しそれは技術及交易範圍の一定せる事を前提としてのみ云ひ得ること、前提が變はれば直ちに變ること云ふ迄もない。加之、統計及經濟學の現狀に於ては具體的に或國が最適人口に達してゐるか如何か、幾何を以つて最適人口となすかを決定する由もないと云ふ。

第四章に於て「國際關係より考察したる最適人口」なる題下に、國防上の見地に基く人口増加の必要を説いて、現下の國際間の不安の存する限り、前章で述べたる個人の幸福よりする人口の最適限度は問題とならず、何れの國も生活程度を低下しても最大限度の人口増加の必要に迫られたることを

論じて、國際平和の確保が凡て個人の幸福の前提條件にして、其の上にてそ人類の生活程度の向上を計るべく、是國際聯盟であると論じて居る。

第二編に入ると第五章は「人口學的及生物學的最適人口」と題して、人口學的最適人口とは平均壽命を最も長からしむるが如き、自然富源と人口との比率なりとし、その代表として印度のムーカージ及獨逸のウオルフの説を擧げて居る。(七九頁及八〇頁) 本章に於て現下人口現象の明暗兩相を擧げ、幼兒死亡率の減少其の他衛生の改善に依り如何に人の壽命の進長せられたかを述べ、一方に於て近時の出生率の減少は國防上のみならず、文明上も危険なりとし、その原因に關する説を紹介して居る。

次に人口の理想は、數のみに非ずとして、質の問題即ち民族衛生の問題を論じて居る。優生又は民族衛生の重要な事に就ては問題はないが、自己の民族の優越を誇大視することは、國際平和の機關と矛盾すべきを説いて居る。(一〇四頁)

第六章に於て結論として、最適人口に關する凡ての説を再説し、著者の説たる、綜合的又は調和的最適人口論を提唱して居る。彼の云ふ綜合的最適人口とは單に經濟的、個人的の見地よりのみならず、國の安全、文化その他諸般の點より適當なる人口の數及質を云ふ。固より今日の狀態を以てしては斯くの如き人口の具體的標準を示す事を得ない。唯彼は左の如き人口狀態は最適人口の見地より之を避けなければならないと云ふ。

#### 1 數の見地より

A 各住民が生活必需品の最低限度を満足するを得ざるが如き經濟的及社會的狀態——從來の所謂相對的人口過剰及人口過少

B 國防上の見地よりすれば、一國が絶望狀態に陥りて他國に對して侵略的態度を採らざるを得ざるが如き狀態(人口過剩)及國力が弱つて他

國をして侵略の野望を起さしむるが如き状態(人口過少)  
質的見地よりすれば

2 質的見地よりすれば  
A 國民の現存數を最も經濟的なる方法により維持するを得ざるが如き  
状態——(再生産率、疾病率、死亡率、壽命、年齢構成等を考慮し  
て)

B 遺傳素質に關する民族衛生の要求に適合せざるが如き状態、各住民  
に對し、その體質に應じ最長の壽命を保證し得ざる状態  
著者の云ふ綜合的最適人口とは消極的に右の如き状態に非ざる人口状態  
を云ふにすぎない。而して斯くの如き綜合的最適人口の達成のために採用  
すべき國際的手段として彼は左の如き事を提唱してゐる。

甲 左の如き國際規定を遂ぐる事

一 綜合的最適人口(人口過剩又は人口過少)に關し統計的及其他の標  
準に關する協定

二 特に人口過剩國及人口過少國に於ける生活程度の相異を無くするた  
めに國際的協力をなす方法及方針に關する協定

三 家族維持の負擔を分配する方法(家族手當)に就ての統一的社会政策  
に關し國際條約又は勸告

四 生活程度を脅威する外國人の均等待遇に就ての一般條約

五 人口の質(優生施設等)に關する統一的政策に關する原則  
乙 右の如き國際協定を遂ぐる目的を以つて左の如き國際的研究を遂ぐる  
こと

一 或種の標本的國家につき人口状態に關する國際的比較

二 最適人口並に移民及植民

三 人口の自然動態並に國內及國際的移民

四 生活程度、農業改革、産業化、資本の國際移動、移民及國際貿  
易

五 世界に於ける外國人労働者の状態

六 人口増加政策(家族政策)及人口制限政策(數的及質的)

七 人口の變動の影響及生活程度に影響ある社会政策の主要問題の研究  
冒頭に述べた如く著者は現に國際労働局に職を奉ずる人であり、本書が  
國際聯盟關係の會議に提出せられたるものなるが故に、本書の論調も結  
論も極めて國際的で、結論は聯盟の活動を促す具體的なる提案に終つて居  
る。

以上極めて荒筋丈を紹介したのであるからは是丈では本書の内容を詳かに  
しないが、本書讀後の私の感想を云ふならば、本書が最適人口に關する諸  
文獻を涉獵して、兎に角一個の自説を提唱して居る事は本問題に關する一  
研究として敬意を表するに吝かでない。最適人口は本文冒頭に述べた如  
く、其前提と標準とに問題があるのであるが、併し各國が平和の中に國民  
の幸福を計らんとするならば、最適人口判斷の標準も、その前提も略一定  
して居る。故に最適人口に關する具體的數字は不明なりとするも、過剩人  
口と過少人口とは自ら明かであつて著者の提唱する如き協定や研究も大い  
に價値あるであらう。然るに現下の状態では世界は平和の中に國民の幸福  
を計らんとする努力が破れて、世は既得の特權を保有して新興國民を抑壓  
せんとする現状維持國——持てる國と、現存の状態を打破して日當りのよ  
き地を獲んとする國——持たざる國とに分れて、最新最高の文明の利器を  
使用して最下等の動物もなさざるべき殺戮に従事して居る。平和と協力と  
を前提とする一切の努力はしばしその歩を留めなければならぬ。然し戰  
争は一時、平和は常態、戦後の新秩序成りたる日に於て最適人口論も又省

みらるるの日もあるべきか。(北岡壽逸)

## フエーアチャイルド著「人口の數と質」

People, The Quantity and Quality of Population by

Henry Pratt Fairchild, 1939, New York, Henry

Holt and Company, pp. 315

「若し北米合衆國の出産率が、今世紀以來の減退率を以て今後も減退して行くならば、一九七五年頃には一人の赤坊も生れなくなるであらう。他方に於て日本は既に七千萬の人口を有する上に、尙年々百萬の人口を加へ、その増加し行く人口に對する生活資料を獲得するために支那に於て荒れ狂つて居る。ムツソリニは世界に對して伊太利人は多産國民であり、多産國民は偉大なる國民であり、エチオピヤやアルバニヤの如き二三の遅れたる國の征服は世界を支配するに必要な飛石であると豪語して居る。ヒットラーはキーキー聲を張り上げて獨逸民族の優秀なこと、他の群小民族は凡てその恩惠的支配の下に服すべき事を絶叫して居る」

是が前米國人口協會會長フエーアチャイルド氏の新著「人口の數と質」の冒頭の書き出しである。本書は著者の學問的著述と云ふよりは通俗的の

フエーアチャイルド著「人口の數と質」

書である。引用も極めて廣く、圖解も多く、固より正確なるものではあるが、引用の根據は凡て之を示さず、興味本位に書かれてある。流石に斯界の一權威の書文に問題の取扱方が廣くして、偏したと思はるゝ點は少しもないが、一定の主張を有する書物でもない。人口問題の全般を興味本位に理解せんとする人には好箇の手引たるも、人口理論にも、人口學說にも何物かを貢獻するために書かれたとは思はれない。従つて讀んで面白いがさて紹介文を書かうとすると一寸困る本である。先づ本書の結構を示すために、その目次を書かう。本書は十三章に分つ。

第一章 最も重要な問題——人口問題の解題である

第二章 生めよ殖えよ——主として動物の世界に於ける繁殖の事實を説く

第三章 人類の原始的發生

第四章 人口の數——主として人口統計の話である

第五章 マルサス、是か非か

第六章 如何に人口は増加するか

第七章 何故に人口は存続するか——産兒制限の話

第八章 最適人口論

第九章 人口の將來

第十章 人口は幾何を以つて足るか

第十一章 移民問題

第十二章 人口の質

第十三章 優生問題

第十四章 結論

第八章乃至第十章及結論の章が、やゝ本書の内容の特質でもあり 主張